２０年のあゆみ

座談会

年表

座　談　会

沖縄県小児保健協会20年をかたる

（司　会）安次嶺　　馨（沖縄県小児保健協会広報委員長
沖縄県立中部病院診療部長）

（出席者）小　渡　有　明（沖縄県小児保健協会長
沖縄県総合精神保健センター所長）

稲　福　盛　輝（沖縄県小児保健協会第２代会長
稲福医院院長）

知　念　正　雄（沖縄県小児保健協会第５代会長
知念小児科医院院長）

仲　里　幸　子（沖縄県小児保健協会副会長
沖縄県立沖縄看護学校校長）

棚　原　睦　子（沖縄県小児保健協会事務局）

小　渡　有　明

稲　福　盛　輝

知　念　正　雄

仲　里　幸　子

棚　原　睦　子

安次嶺　　馨

安次嶺　沖縄県の小児保健協会が創立されて今年で２０周年という節目でございます。これまで沖縄県小児保健協会は本当に多彩な活動をして参りました。本日は沖縄県小児保健協会の創立以来中心になって活動して下さった方々にお集まりいただいて、これまでの協会の歩みを聞いたりそしてこれからの１０年２０年先の活動について考えていきたいと思います。

本日お集まり下さった方々をご紹介いたします。まず協会の会長をご経験なさった先生方が３人いらっしゃいます。稲福盛輝先生、知念正雄先生、小渡有明先生でございます。それから現在副会長をしていらっしゃる沖縄看護学校長の仲里幸子先生、過去１５年間事務局をしっかり守って下さった棚原睦子さんにもおいでいただいています。以上５人の方々にこれまでの協会の歩みについてお聞きしたいと思います。

稲福盛輝先生と知念正雄先生はこの協会が設立された時の発起人でいらっしゃいます。まずお二方に当時の経緯について色々お伺いしたいと思います。稲福先生、この協会はもう２０周年を迎えたわけでございますが、まずどのような経緯でこの協会が設立されたかということについて、振り返ってお話しをしていただきたいと思います。どうぞ。

稲福　協会が発足してかれこれ２０年になりました。懐かしい思い出も沢山ありますが、本協会を発足した動機は、まだ日本復帰前でその当時沖縄には医学に関する学会が非常に少なかったので、そこで何らかの学会を沖縄で発足してみたいということで、私は昭和４６年に日本民族衛生学会を当時琉球大学におられた先生方と一緒に設立いたしました。

また、当時私は日本小児科部会の会員でしたが、その当時はお忙しく沖縄からはなかなか本土の学会に出席なさってご研究発表なさる先生方が少ないという状態でした。そこで医師、保健婦、他の医療関係者の方々にも県内で研究発表ができる沖縄にも何らかの学会支部みたいなものが出来ないかなと模索をしておりました。幸い恩師船川幡夫先生が当時国立公衆衛生院から東大に移られた時期でしたが、相談いたしました。先生に沖縄の実情を申し上げ、一部の人が本土で学術発表しますけれども、多くの保健婦、看護婦の方々はなかなか発表する機会が非常に少ないから、沖縄に小児保健協会の支部でも出来ませんかというお話を持ち掛けましたところ、先生はそれはいい考えだと話されましたので、私は早速その話を持ち帰りました。

当時沖縄では小児科医も大変少ないうえに医療事情も悪いものですから、大変お忙しい先生方ばかりでなかなかそのお話しを受け止めて下さる先生が非常に少なかったんです。幸いにして知念正雄先生、山本達人先生にお目に掛かる機会を得まして、実はこうこうで沖縄にも小児保健協会支部設立の話をと持ち掛けましたところお二人の先生が私の主旨をご理解していただき、じゃ作ろうじゃないかとご賛同を得たのです。

実は船川先生から設立については一言いわれておりました。即ち「今までの日本小児保健協会は、未だ支部が設立されない県もあり、あってもあまり活動していない。その理由の一つは大学主導型が多いからややもすると研究が大学寄りになりがちになる恐れがある。もし作るんだったら沖縄では是非各方面の方々の発表する場所を与えるように作ってもらいたいと、これが私の願いである」ということで、私もそれを受けとめてこれは小児科の先生ばかりの集まりでは困るなと思い、仲里幸子先生や各分野の方々にもご相談をしたのです。

そこで最初は復帰の年に設立をしようという私個人の考えでしたが、この年は民族衛生学会を創立したばかりと日本復帰という非常に忙しい時期でまた、若夏国体が開催されることもあって会長の役職をもっていましたので、忙しく出

沖縄県小児保健協会発会式及び総会

プログラム

日時　昭和48年7月28日（土）
午後2時～5時

会場　若松ホール

後援　県厚生部
県医師会
沖縄タイムス
琉球新報

協賛　明治乳業（株）

御案内

1973.7.1.

盛夏の候。皆様には益々御健勝にて本協会のことと存じます。
さて近頃、私達は、かねてより母親の沖縄小児保健協会を発足させ、小児保健に関する様々な問題について話し合う場を持つことにいたしました。
今後これを機会にそれぞれ立場から応援ムードを起こし、沖縄の小児の健康と幸福のために、活発に活動していきたいと存じます。
つきましては、ご多忙に御賛同下さいまして、多数御参会できます様、御案内申し上げます。

記

期日　昭和48年7月28日（土）午后2時～5時迄
会場　若松ホール（那覇国際劇場向い）

式次第
1. 発会式及び総会（午后2時～3時）
2. 一般講演（午后3時～4時）
3. 記念講演（午后4時～5時）
講師　東京大学教授　船川幡夫

一般講演
1. 中部病院小児科に入院した感染症患者の実態――1才未満の幼児について――
県立中部病院小児科　照屋禎祐・孫子・性
2. 新生児死亡率について
厚生部母子保健課　仲里幸子
3. 最近の沖縄中部における麻疹流行の様相について
山本小児科（嘉手納）　山本連人
4. 琉大病院小児科1年間の臨床
（琉大病院小児科）　知念正光・他
5. 沖縄における微量元素の問題点について
琉大教育学部　斎藤義夫

記念講演
生涯教育の観点からみた小児保健について
東京大学教授　船川幡夫

発起人（五十音順）
村福盛輝（陸福医院）
伊敷長徳（琉大医学部）
小渡有朝（名護保健所）
川平盛連（川平盛連人科医院）
竹中静雄（琉大保健学部）
知念正雄（県立中部病院小児科）
渡口眞清（沖縄赤十字病院小児科）
仲里幸子（厚生部母子保健課）
仲地吉雄（仲地小児科医院）
平山清栄（琉大附属病院小児科）
藤巨虎秀（琉大保健学部）
眞玉橋ノブ（琉大附属病院）
宮城英雅（厚生部母子保健課）
宮良文（コザ保健所）
山本連人（山本小児科医院）

来なかったんです。

翌年になりいよいよこれを実らせようと思って知念、山本両先生にも今年こそ実現させようと話し合ったわけです。最初八汐荘で3名集まって協議をし、お二人の先生が色々細部にわたる規約、諸準備をなされましたので私は非常に安心をし、先生方にお任せしたような調子です。その後2、3回の会合を持ち、その後県庁に出向いて、当時予防課長の宮城英雅先生、仲里幸子母子成人係長やその外の方々のご賛同を得て1973年7月設立を決意しました。

ところで初代の会長はどなたにお願いしようかと模索をしておりました。そこで発起人の15名の方々がお集まりになって協議をいたしましたところ、仲地吉雄先生にお願いしたほうがいいんではと意見が一致したので初代会長に仲地先生をお迎えして、昭和48年7月28日に若松ホールで第1回目の小児保健協会設立総会の特別講演に船川先生をお迎えして設立したのであります。

その後毎年回数を重ねていくたびに多くの先生方や関係者のご賛同を得て今日の小児保健協会へと発展したのです。顧みますと私としては単なる小さな学術学会としてやるつもりだったのがこんなに大きく成長したということは、これは当時の県庁の方々並びに小児科医、多くの会員の皆様方のおかげであり、ここに20周年を迎えることは非常に感慨無量で感謝の念で一杯であります。

安次嶺　どうもありがとうございます。設立発起人のお一人で、二代目の会長でもございました稲福先生にこれまでの経緯についてご説明いただきました。知念先生も後に会長をおやりになりましたし現在でも中心的なメンバーでいらっしゃいます。知念先生からも一言当時の経緯についてお話しいただきたいと思います。

知念　小児保健協会が２０年になるということで、最初からの経過を考えてみますと非常に長いように思われ、段々忘れかけています。創立した当時のことは今稲福先生がお話しになられましたように先生がきっかけを作って下さったのです。ある日、稲福先生から連絡がありまして、話したいことがあるということで私呼ばれたんです。そして先程先生がお話しくださったようなことで、沖縄に小児保健協会というようなものを作って学会活動をしようというお話しを伺ったんです。

当時私は県立中部病院にいまして、小児科スタッフが少ない時で非常に忙しい時でした。しかも重症な子ども達がいていくら一生懸命やっても亡くなっていくこともありました。重症になる前になんとか出来ないかと、もっと予防医学的な活動をすることによって子ども達の病気を軽く出来ないだろうかというようなことをしきりに考えていた時でしたので、稲福先生のお話しを聞いてすぐ飛びつきました。実は大変嬉しかったんです。病院の外で活動をして病気の予防的な仕事が出来るんだったらこの上も無い事だというふうに思っておりました。

私はいろんな走り働きのことは喜んでするということで稲福先生と山本先生と３人で２回ほど八汐荘で話しあいました。大体の話し合いをしましてから厚生部の予防課のほうにお伺いしました。さらに会長の件で仲地先生ともお会いして、こういう会を作るから会長になっていただけませんでしょうかというお話しを持っていったのも稲福先生とご一緒でした。そういうふうに小児保健協会の最初の頃というのは自分自身で保健的な活動をやりたいなと思っていた時に、稲福先生からお話しがあったので先生の企画に飛びついて賛同したということを今でも覚えております。

これまで２０年間皆さんと一緒に小児保健協会の中で仕事が出来たということは、私の人生にとって大変幸せなことだと思っております。

安次嶺　お二人の先生方に協会の設立の経緯をお話しいただきました。次に仲里先生にもお話しいただきたいんですが、当時は仲里先生は県の厚生部の母子成人係長をしておられましたし、それからこの協会発足の時は幹事もしておりました。それから一貫して、この協会の裏方といいますか内部を引き締める役割をやってこられたし、仲里先生抜きではこの小児保健協会の存在も有りえなかったというくらい大事な働きをしてこられたわけです。そういう点でご感想を一言お願いいたします。

仲里　今、お二人の先生のお話しを伺い当時のことが昨日今日のように鮮明に想い起こされます。発起人の３人の先生がご一緒に予防課にいらっしゃいました。ちょうど課長は宮城英雅先生でした。４人で何かお話しをしているところに私が呼ばれ行きましたら、課長から先生方はこういうことでいらっしゃってるのだが係長としてどう思うかということでした。

当時、私もとても悩んでいることが一つあったのです。それは、その年の４月から「医療機関に委託して行う妊婦・乳児一般健康診査」が始まったのですが、沖縄県ではどうしようかということで、復帰間もないし、いろんな整理に追われている時だったのです。その時、この小児科の先生方の手伝いをすることによって、先生方に逆にまた手伝ってもらえるのではないかという計算をしたわけです。それでいいですよやりましょうと、先生方は事務的ないろんな仕事をする手足が無いということでしたから、じゃ私どもの所で引き受けましょう、ということで先生方にお会いしたのが最初のことなのです。

その後、幹事会を開くことから設立総会を開く事など事務的な仕事が本格的に始まったのです。その当時保健婦の眞部智恵子さん、それから事務の比嘉恵子さんに大城幸進さんが私の母子成人係の職員だったのです。係全員で引き受

けてやったのがこの小児保健協会のスタートに繋がったのです。予防課としては乳児一般健康診査をどうするかという問題があったものですから、大変そういう意味でも運命的な出会いがあったのではないかと思います。その日のことを本当に懐かしく思い出します。

安次嶺　私などもその頃の経緯は時々は聞いておりましたけれども、本当に沖縄の復帰直後ですね、まだ沖縄の医療事情も良くなかった頃に、よくそういう発想の元にこの会を作られたもんだとつくづく感銘を受けているのです。それでは今日こちらにはお見えになってらっしゃらないんですが歴代の協会の会長としてあとお二方いらっしゃいます。そのお一人はもう既にお亡くなりになりました仲地吉雄先生、もうお一人は佐久本政彦先生でございます。この両元会長についてもお話しをしていただきたいと思います。稲福先生、仲地先生についての想い出などお話しして下さいませんか。

稲福　私と仲地先生とは最初からは関わりをもっておりませんでした。きっかけは確か小児保健協会の会長になられてからです。しかし、仲地先生には私たち小児科医は学術への情熱には敬服していたのです。ですから私としてもこの方が会長になって下されば非常に有難いと内々思っていました。恐らく他の方々もそうだったと思いましたので知念先生と一緒にお邪魔したら案外快く会長を引き受けて下さったので私達も安心しました。実は私自身はその前にご先輩の長田紀春先生、千原繁子先生にも打診しましたが、大変お忙しい方々で中々お受けして下されませんでした。

そこで、私達は仲地先生をお迎えすることができたことを喜んだんです。仲地先生は厳しい方であったのですが、私には私的な問題までも先生からお願いされたり相談を受けたりして懇意にしておりました。

先生が「日本一の小児保健協会にしてみせようじゃないか」という決意をなされて会長を引き受けたことを覚えております。そこで我々も「先生やりましょう」というふうに皆喜んで先生の主旨に賛同したわけでございますが、残念なことには先生は私情があってどうしても1度アメリカでお勉強したいということで1年で一時小児保健協会から離れてアメリカに留学なさったのです。

その次に図らずも私が会長を引き受けたのです。仲地先生は2年後沖縄にお帰りになりまし

た。3代目は佐久本先生が会長になられて協会の基盤が着々と出来上がりました。4代目に再び仲地先生が帰国して小児保健協会の会長をお引き受けになられました。

先生は今度は沖縄で日本小児保健学会を開催しようじゃないかということを理事会に何度かお話しかけておりましたので、皆これに賛同して着々と準備を進めていたところ、先生の持病の高血圧で突然お亡くなりになって我々も愕然とて一時はどうしようかと迷ったのです。

ところが幸いにしてさすが仲地先生で、前々から後継者をちゃんと考えておられまして、稲福くん次の会長は知念先生にお願いしようねとよくおっしゃっておりましたので、私も即座に賛成をしました。幸いにも先生の亡後の会長を知念先生が引き受けて下さって、後でも色々お話しが出ると思いますが立派な大仕事をなさって小児保健協会の一番困難な時代を乗り越えて、全国小児保健学会長として大成功を成し遂げたのですが、これも仲地先生の先見の明があったと思います。

安次嶺　知念先生、佐久本先生についてお話しいただけませんか。

知念　はい、稲福先生の後を引き継いで佐久本先生が会長になられました。当時会長は規約で2年交代ということで、再任しないで交代でやりましょうという暗黙の了解みたいなものがありまして、稲福先生の2年間の後を引き継いで佐久本先生がおやりになったんですね。

佐久本先生は皆さんご存じのように温厚誠実な方でいらっしゃいますし、協会も事業の方向が見えてきて理事会もスムーズにいっておりました。佐久本先生は上手く協会をリードされて2年間の事業を着々とおやりになって、大体あの頃までには今の乳児健診の事業も軌道に乗っていったんじゃないかと思います。そしていろんな事業に対する案が出たと思います。佐久本先生が熱心に小児保健協会をリードしておられたのをおぼえています。

私はまだ若輩で理事の皆さんの意見を聞きながら小児保健協会の活動に参加していた時でした。

安次嶺　それでは現在6代目の会長をしていらっしゃる小渡先生にこれまでの沖縄県小児保健協会の事業を総括して紹介していただきたいと思います。小渡先生よろしくお願いします。

小渡　3名の先生方から小児保健協会のいわゆる黎明期の頃のことを色々とお話しいただい

たわけですけれども、現在私が会長として勤めておりますけど、これはお話しいただいた３名の先生方、或いは理事の皆さん方が色々とお助けをいただいてどうにかこうにかその任務を果たさせていただいております。

私ども協会は先程ちょっとお話しに出ましたが、創立当初から乳児健診を協会が委託を受け実施してきたことが協会発展につながったと思っております。従いまして私も小児保健協会がここまでやってこれたその大きな柱は乳児の一般健康診査と思っております。

この乳児一般健康診査もこの２０年間大分変わってきている。それはどのように変わってきているかと申しましても、私も協会ができました最初から理事として末席を汚させていただいておりますが、当初は乳児健診といいましても本当にただ小児科医が診察をし、尿検査とか貧血検査はありましたけど、今のような具体的な指導だとか、或いは身長体重等の計測とかは無かったと記憶しております。これでは健診をするにはこれじゃいけないんじゃないかということで身長体重もきちっと計測をしてやろうといい出し、始めたのは小児保健協会が始まって恐らく２、３年経ってからだったと記憶しております。

それから離島の健診につきましても当初は沖縄本島だけでしたし、沖縄本島周辺離島の健診は恐らく３年位経ってからだと思います。確かこれも知念先生が発案なさったと記憶しておりますが、やはり理事会の席で本島だけでなく離島の子ども達にも同じように健診の機会を与えなきゃいけないんじゃないかというようなことがありまして、多少費用の面でのマイナスはあってもそれはやらなきゃいけないと、そういったことがありまして離島の健診もやっていくようになりました。

そういうことで乳幼児健診も年々実施市町村も増えてまいりました。当初は確か５３市町村の中で実際にやったのは２０市町村足らなかったかなと記憶しております。私は当時名護の保健所長をしていましたけれども名護から離島なんか出掛けていって健診しましたが保健所事業の一貫として健診をやりました。それでカルテをそのまま協会の事務局へ送ったというようなことも覚えております。それから健診に保健指導或いは栄養指導も加わりかなり充実してまいりました。

乳児健診の他に母子保健研修会をやりました。昭和５４年が第１回目の母子保健研修会で、以来年に１回母子保健関係者を対象にした研修会をやっております。また関係者だけでなしに広く一般のお母さん方に育児の知識や情報を提供しようということで育児講演会を実施したらどうかということが出て昭和５７年から実施したのです。

私ども小児保健協会が社団法人として設立したのが昭和５６年で、その設立した翌年というのはちょうど５７年というのは又後でも出てまいるかと思いますが、いわゆる第２９回小児保健学会を知念先生が主催して行われた学会を開催された年でもあるわけです。その後こういった講演会、研修会等を実施しながら今後の協会の将来像を考えて色々と活動していかなきゃならないんじゃないかと踏まえた形で子どもフォーラムというものを琉球新報社と共催で実施しました。これが平成元年だと思いますが、平成元年に第１回目をやり、今まで３回の子どもフォーラムを開催し広く県民にアピールをしたと思っております。

それからその他私も協会設立当初からおりますけれども、当初から沖縄の小児保健という冊子をずっと発行いたしておりまして来年ちょうど２０年を迎えますがこれまで１９号まで発刊をいたしております。毎年１冊づつ発刊しております。これも年々内容的にも充実してまいりまして現在ではいわゆる沖縄県の小児保健の学

会誌と言っても過言ではないと思うんです。文献として県内外からも評価をされているところであります。

またいろんなマスコミ等との広報活動も折りに触れて色々やられてます。沖縄タイムスに新聞などへの子どもの健康に関する記事の連載、或いは琉球新報への掲載と、それを今度は一つの冊子にまとめて発刊をしたりしております。また最近では私どもが実施しております健診をより内容的に或いは効果のあがるようにもっていきたいということで、健診にタッチする小児科医はもとよりいろんな関係者の資質の向上を図ることを目的にマニュアル的なものを作ったらどうかということが出てまいりまして、乳幼児健診マニュアルを制作しそして発刊をいたしております。また他にも色々あるかと思いますが大体大まかに申し上げますとそういったことだと思います。

安次嶺　仲里副会長、何か補足することはございませんか。

仲里　今の離島の宮古八重山の健診のことを少し付け加えます。当時、東大の教授をしておりました平山宗宏先生のことです。平山宗宏先生と沖縄県は風疹障害児の健診の時からのお付き合いがありました。

第１回目の風疹障害児の健診の時に平山先生が団長でおみえになり、それ以後先生は毎年沖縄県にいらっしゃっていました。乳児一般健康診査が始まりましたが、実際に恩恵を受けたのは本島の子どもでした。それで小児科医も少なく宮古八重山の子ども達はどうしようかと大変困っていたのです。たまたま平山教授が沖縄県にいらっしゃっていましたのでこう相談しましたら厚生省の心身障害児の研究班があるから、その班を活用しての健診システムを確立することはどうだろうかという話が出ましたので、宮城予防課長とそれを活用して宮古八重山の子どもたちの健診のシステムを確立しようということで、いわば一つの研究班の中でスタートしたのです。先に宮古島から始まりました。それから翌年の正月明け早々に八重山が始まったのです。しかしそれが時期的に色々な問題があり、後には夏にやるようなシステムに変わってきたのです。当初は厚生省の心身障害児研究班システムの中でスタートしたのです。その後県と小児保健協会と業務を調整しながら、行政と民間組織の小児保健協会が一体となり沖縄県の母子健康管理、特に乳幼児の健康管理を行ってきた

ことは大変素晴らしいことではないかと思っております。

安次嶺　会長副会長にこれまでの協会の歩みについて全般的なお話しをしていただきました。後ほど又もうすこし詳しくディスカッションしていただきたいと思います。

それでは次に協会の２０年間の歴史の中で１５年間事務局でしっかりと皆の色々な要求も聞き、忙しい事務局を切り回して下さった棚原睦子さんにお話しいただきたいと思います。大変ご苦労な仕事だったと思うんですが、色々と言いたいことも沢山あるかもしれませんが、これまでの１５年間の恨みつらみを言って欲しいですね。

棚原　私は協会の４番目の事務局職員として、昭和５２年５月から関わって参りました。設立当初は、宮城和子さんという方が半年ぐらいお勤めしており、２番目は伊千久美子さんが１年、３番目は宮里園子さんが１年お勤めになり、次に私が勤めることになったのです。その頃の事務所は、沖縄県環境保健部予防課母子係の片隅に机１個置いただけのものでした。県に１人分の光熱水料費を支払いしての間借り事務所です。年々増える資料は机に納まらず、廊下にキャビネットを置かせてもらい、その上に積み上げていく状態でした。勿論その他の備品は持っていませんでしたので、予防課の備品、複写機、電話、カッターなどを無料で貸してもらっていました。でも、幾分は消耗品の形でお返しはしました。その頃仕事をしていて１番の願いは、自分の机の上に専用電話があればなあーということでした。専用電話がなく仕事が思うようにはかどらなかったのです。

当時の業務のほとんどは乳児健診のことで、まだ健診についての市町村職員等の理解も十分でなく、その調整に保健所の看護課長や担当保健婦等のご協力を始終お願いしていました。また、郵便事情もよくない頃で、週１回は予防医学協会へ受診票を取りに行ったり、保健所へ備品を届けたりして外出する事も多かったと思います。私の留守には、母子係の方が電話やお客様の対応をやって下さいました。

その当時の予防課長は現在の小渡有明会長、係長に仲里幸子副会長、係りに現在理事をやって下さっております新里厚子さんもいらっしゃいました。私には始めての仕事で始終失敗しては、いろんな方にいろいろ教えてもらい助けられました。特に難しい問題や調整事項が生じると仲里幸子係長、新里厚子さん、小渡有明先生に助け船をお願いしました。そのかわり母子係の仕事が忙しい時はお手伝いもしました。また、予防課の新年会・忘年会などの行事にも一緒に参加させてもらい楽しく過ごしました。

５０名位の予防課職員の中で、遠慮がちに、助けられながら、教えてもらいながら、仕事をしたことはいい思い出になっております。

こういう状況が設立から昭和５６年の前半頃までで、５６年頃は大体健診も軌道に乗ってきてました。５７年に全国規模の日本小児保健学会の沖縄開催も決定している時期の５６年３月３１日に、任意団体から社団法人へと組織移行いたしました。その頃の母子係長が元理事の宮城シゲさんでした。その法人組織移行の事務手続きのために弁護士さんがタッチしてたのですが、殆ど文書作成とか県との調整事項等の事務的なことは宮城シゲさんにやっていただきました。宮城さんだから短期間に手続きが済んだのだと思います。

法人移行したその年の１２月に公害衛生研究所のあった建物久茂地へ事務所を移転いたしました。その時は日本小児保健学会開催も間近に控え事務所が狭ければ仕事も出来ないということで、予防課長の小渡先生はじめいろんな方に、関係部へ交渉してもらい実現したことです。

翌年５７年には全国学会です。その学会も今考えると何も知らずによくやったなということ

しか覚えていませんので、今考えるとぞっとするくらいです。理事の先生方がプログラムを組むために休みを返上して夜中の1時2時までやって下さった。それを見て私達も頑張らなくちゃという気持ちでした。今でもそうですが先生方のバイタリティーにはいつも関心しています。協会が法人移行したことは、協会の飛躍と発展に繋がり社会的存在も大きくなったことを感じました。また、全国学会を沖縄で開催したことは、理事の結束と、その後の小児保健活動を推進するうえで、先生方の大きな自信に繋がったと思います。この2つの出来事はこの２０年で大きな事業であり、大きな転機であったと思います。私にとっても同じです。

５７年の学会も無事終わり、今まで職員が1人だったのが、2人となり仲里園子さんと一緒に仕事をやるようになったのです。それから6年余り久茂地で頑張っておりまして、昭和６３年の4月に県の薬務課管轄の元の薬品倉庫に移りました。その後元年6月に仲里さんがお辞めになって、変わりに饒平名艶子さんと7月から一緒に仕事をやるようになりました。

事務所として移転するところは、いつもお化け屋敷みたいな古い建物で外部のお客様からは、恐くないかとか寂しくないかと聞かれたり、住めば都よ、と答えると、逆に変な感心を受けておりました。また、慣れた頃の平成元年4月に現在の社会福祉センターの4階に移ってきました。ずっと事務所を転々としてきたのです。

当初は健診ばかりの仕事だったのですが、現在は業務量も多くなりまた多様化しました。それに伴い保管資料も多くなり、現在の事務所は手狭で、窮屈な思いをしています。新しい事務所か会館なり早く出来、幅広い視野から沖縄の子どものために仕事が出来ればという夢を持っております。

最近思うことに当協会がこれまでに発展できた大きな要因は、理事の先生方は何事にも前向きな姿勢で取り組むこと、そして沖縄の子どもを思う気持ちが大きな力となって動いたことだと思います。それに当協会は県から乳健の委託を受け、保健所や市町村、いろんな関係者の協力を得て実施していることも大きな要因でしょう。

私自身もこれまで仕事をしてよかったなと思うことは、仕事を通して理事の先生方や保健婦さん、いろんな方々に巡り会い、いろんなご指導をいただけたということはとても嬉しいことでしあわせなことだと思います。今は先生方にいろんな面で育てられたということで感謝しております。あと色々あるんですが今はこれだけにします。

安次嶺　本当に事務局としては大変苦労したと思いますが、仲里先生何か。

仲里　付け加えますが、宮城和子さんが最初の職員で入ってきましたが、それより以前は先にご紹介しました眞部智恵子さん、比嘉恵子さん、大城幸進さん達が5時以降これから小児保健協会の仕事をしましょうと仕事を始めたのです。

当時はお金も無かったものですから眞部さん、比嘉さん、大城さん3人が大城幸進さん個人の車に乗って、彼が運転して土曜日の午後先生方に報償費を支払いに各病院をまわりました。送金するお金も無かったのです。今、当時のことを彼女達が言うには、よくあのお金紛失しなくて、よくやったなと、時には車の中でこのお金無くしたらどうする、いくら財産叩いても自分たちでこのお金を払うだけの給与も無いよねという話をしながら報償金を支払いに回ったのですよ、ということを話しておりました。そのように大変奉仕的に係の眞部さん、比嘉さん、大城さんが最初の事務局の土台だったのではないかと、思っております。

知念　事務局の棚原さんは辛かったことはあまり話さなかったんですが、私は大変ご苦労を

かけた会長の一人として「色々とご苦労さんでした」というふうに申し上げたい。会長のなかで棚原くんを怒鳴ったのは仲地先生と私くらいじゃないかなと思っています。

仲地先生も大分きついことを時々事務局のほうに言っておられましたので、棚原くんは随分困ったんじゃないかなと思っています。私自身も根が短期なものですからかっとなるといろんなきついことも言ったような記憶があって、事務局を困らせた覚えがあります。そういうのをじっと堪えて仕事をコツコツとやってきた事務局に対してお礼とお詫びを申し上げます。

小渡　それからもう一つですね事務局の件で協会の事務局規程を作ったんですね。作りましたけれども、これもその事務局規程もそれこそあーでもないこーでもないということで大分私と仲里さんと棚原さんと遅くまでやった。それでもですね私と仲里さん二人はあれ持ってこいこれ持ってこいとやりましたけれどその資料を全部集めてくれたのは全部実は棚原さんなんですね。

事務局規程を作ってから勿論注文を付けた記憶もありますし、恐らく仲里さんは僕以上に注文をつけておられたように思います。しかしその注文を全部一手に引き受けて資料を全部集めそれが県の資料からそれから県内にあるいろんな団体がありますけれどそういった団体の資料を集めて、事務局規程をきちっと作ってくれました。恐らく県内に幾つか団体がありますけれども、私どもの協会の事務局規程ほどきちっとしたものは無いんじゃないかということで私は自負してもいいんじゃないかと思っています。これも棚原さんの大きな仕事だと思います。

仲里　もう一つ付け加えますと、私も看護協会の会長をしたり色々な団体に携わってきていますが、小児保健協会が安心して仕事が出来るというのは事務局に信頼できる事務局員がいて、しっかり守ることが出来るから成り立っているのです。これだけ多くの予算を出し入れしたり、乳児健診のプログラムを作ったり、それからいろいろな事業をやっているのを見ますと、よく事務局が頑張っているなと思うのです。どんなことを言われようと、はいはいと言うだけで、よく頑張るなと思っております。普通でしたら、これだけの会計を取り扱うには、失礼ですが会長さんも理事の皆さんも心配でならないというのが普通の団体だと思うのです。しかし、これまで１円の問題も起こらないし、これだけのこ

とが出来るというのはやはり人間が正直で、私どもは事務局職員に恵まれたということで、これが小児保健協会を支えている大きな土台になっているのです。

安次嶺　そうですね、今まで先生方がお話しなさっているように、事務局に棚原さん無くして小児保健協会の存在は有り得ないということですね。会長の代わりや理事の代わりはいるけれども、今棚原さんの代わりになる人はいないということです。最重要な人物であるわけですね。これからもまた身体に気を付けて頑張って下さい。

協会の歴史の中で色々と人材に恵まれて、これまでの協会の充実した活動があったわけです。それではこれまでの協会の活動の中で、やはりこれは非常に大きな仕事であったということを幾つか取り上げてお話しいただきたいと思います。

まず第１に、協会は毎年学会を開催する沖縄県小児保健活動の（学問的な）中心的な存在であり、機関誌も毎年発行しています。

第２に全国の日本小児保健学会の支部でもありますし、この活動を通じて私どもは全国の各地にネットワークを張り巡らせていることにもなるわけです。

実は第２９回日本小児保健学会が昭和５７年に沖縄県で開催されました。この時には知念先生が会頭となってこの学会を主催され大きな成功をおさめました。そしてまた全国の小児保健関係者から非常に大きな評価を受けました。知念先生、大変その時はご苦労なさったと思いますが、その辺の思い出をお話し下さいませんか。

知念　昭和５７年９月３０日、１０月１日と２日間にわたって第２９回日本小児保健学会を開催したんですが、今安次嶺先生が言われたように、その学会が盛大にしかも今までになく多数の演題が集まって、大勢の会員が沖縄に来て大成功をおさめたということは、沖縄の小児保健協会の仕事として非常に大きなものであったと思います。またそれを成功に導いたのは役員の皆さん方はじめ、事務局および協会を支援してくれた多くの方々のお陰だったと思っております。この学会が成功したということは役員の先生方が非常に努力され運営をなされたからなのです。このことに対して今も私は感謝しております。皆さん方にお礼を申し上げたいと思います。

この第２９回の日本小児保健学会が沖縄で開催されることになった経緯については、実は私自身あまりよく知らないんです。というのは前会長の仲地先生が理事会で突然沖縄で学会を引き受けることになりそうだというような話をされたことを覚えています。どうしてそういう情報が入ったのか、どういう経緯でそうなったのかなと内心不思議に思いました。私は仲地先生の横の繋がりの広さにびっくりしたものです。

理事会が何回か開かれる内にどうもそれは確からしいということになって、理事の先生方もやろう、やろうというふうにして皆活発にその準備を始めたことを目の当たりに思い出します。そうこうしているうちに学会をお引き受けになって間もなく、仲地先生が不幸にも亡くなられてあれよあれよという内に私が会長を引き受けることになってしまいました。

私自身どうして自分がこの学会を主催することになったのかなと今だに不思議に思って、自分が引き受けるべきだったのかなと考える時が時々あるのです。いずれにしても始めての経験でありますし、しかも大学の教授でない、年も若い私が全国学会を主催するということは異例なことなんですね。恐らくは本部の役員の先生方も大変心配されていたんじゃないかと思います。

私自身も非常に不安でありましたし、母校の弘前大学の泉幸雄教授や札幌医大の中尾亨教授にも準備期間中に色々とご相談申し上げました。

何はともあれその準備の間、原先生を始め小渡先生、仲里先生、稲福先生を始め、役員の先生方がそれこそ夜遅くまでワイワイガヤガヤと、集まって仕事をしました。あの時ほど燃えたことはなかったんじゃないかというふうに思いますね。よくあれで疲れずに、また夜遅くまで何日も議論しながら準備したものだと、そのエネルギーに不思議に思っております。あれはきっと私どもの、第二の青春だったんじゃないかというふうに思っております。

いずれにしても演題数が二百数十題で、集まった会員数が１番多かったのが沖縄の学会で、それ以来現在まで大体同じような傾向が続いてますね。このことは沖縄で開かれた学会が従来の日本小児保健学会の流れを変えたような気がします。そういう意味で沖縄県小児保健協会の皆さんの果たした役割は非常に大きかったと思います。私自身は原副会長に「お前は黙って座っていればいいんだ」というふうに言われまして、学会期間中ただ座って皆さんがおやりになるのを安心して見ていただけのような気がしています。

安次嶺　確かに日本の小児保健学会の歴史の中でもそういうふうに大きな意味を持った学会だったんだろうと思いますね。沖縄の学会以来、殆どの学会で非常に多くの人を集め、沢山の演題を集める学会に成長したと思います。

小渡　今でも日本小児保健学会は各県持ち回りでやっていますが、そこへ出席しますといろんな先生方からこんなに学会が発展したのは、沖縄県で開催した時からだよなとよく言われました。やっぱり知念先生が会頭した我々の学会が今の、非常に大きなことを言うんですけども日本小児保健学会の流れを変えたというものがあったんだろうなと思いますね。

仲里　確か東京での学会だったと思いますが、村上会長が昼休み時間に「ちょっと聞きたいことがあるから来てくれ」と言われて、お伺いしましたら、「沖縄県で学会をやることについて大丈夫かなという意見があるのだが、どう思うか」とお聞きになったのです。「大丈夫ですよ。事務局もまた、理事の若い先生方が沢山いて本当に皆意欲があり元気ですから大丈夫です」「そうかじゃ沖縄学会を押し通してもいいんだな、大丈夫だと僕も思っているから」と言われました。本当に大丈夫かなという意見があるけどということを村上会長さんに聞かれたことがありました。

安次嶺　確かに当時、平山先生や巷野先生という大御所の先生方がピヨピヨの若い沖縄の組織を全面的にバックアップして下さったことが我々の学会を成功に導いたもう一つの力だったと思います。

小渡　学会というのは普通大学の教室が引き受けてやるんでしょう。それをやるにはちゃんと大学の許可がいりますから、ちゃんと手足が有るわけですよ。それが我々の場合は手足が有るようで無い。理事は皆それぞれ仕事を持っているわけですから専任じゃないわけですよね。ですからその畑を置いちゃ、片手間と言っちゃ非常に語弊がありますけど、片手間みたいなものですね。ですから結局土曜日曜日の休みを利用したりとか、或いは夜の時間外を利用してやったりとかしてやったわけですからね。それこそ手足の無い学会だったんじゃないかと思いますね。その中で事務局にもよくやってもらいましたし、本当にこれだけでよくできたなと思いますね。

仲里　本当に、役員が、理事が全て事務局員だったのです。だから出来たのです。

稲福　私は先生方が今おっしゃったように色々な条件がそろってできたことは当然のことですが、特に知念会長の人徳と、さらに先生の学術的な見識をお持ちの面も大きな要因であります。

そのバックを支えて下さったのが安次嶺馨先生その他の方々の熱烈なる支援、それと堅実に蓄積してきた当協会の財政等が全国ではじめて大学外の学会長による全国大会が大成功を成し遂げたと思います。これを機に今後当協会にとってまた一段と飛躍と自信を得てこれで私が申し上げた仲地先生の念願を叶えたと思い改めて知念先生に敬意を表します。

知念　この学会を沖縄で開こうと、それを沖縄に持ってきたということは仲地先生の大きな功績ですね。私はそう思います。
それまでは沖縄で全国学会を開こうということは頭になかったですから、突然仲地先生がそういうお話しを持ってこられたのでびっくりしたことを記憶しています。やはり仲地先生は偉かったと思います。

安次嶺　有り難うございます。この学会の話しは後一時間位でも続けたいくらい我々にとっては非常に大事な仕事だったし、それだけ思い出に残っているものでございます。まだまだ協会の仕事はありますので次に移らせていきます。

私たちの協会はいろいろな広報活動をやっております。これ迄にも新聞に記事の連載をやりましたし、それからまた特筆すべきことは子どもフォーラムをこれまで3回行いました。さらにこれまでの活動を活字にしまして幾つかの出版物も出しております。これからも、この様な広報活動というのは私達の大事な部分だというふうに考えています。

この子どもフォーラムというのは大変大きな社会的反響を得ました。これまで3回行ったフォーラムについて、まずそれを発案なさった知念先生に手短にご説明いただきたいと思います。

知念　子どもフォーラムは小渡会長を中心にして琉球新報社の共催を得て3回に亘り行っています。小児保健協会を一般の方々に知ってもらい、子どもの問題をアピールしようという目的がありました。

特に沖縄県では長寿社会の中でお年寄りの問題が色々いわれていて、どうしても子どもの問題が隠れてしまいがちです。このようなときに子どもフォーラムというのを企画して小渡会長を中心にして開催したわけです。やはりこれもいろんな方の協力を得て、会員以外の方も多数会場に集まりましたので、上手くいったんじゃないかと思います。

安次嶺　小渡先生、会長として大変ご苦労なさったわけですが、先生のご意見もお聞かせください。

小渡　知念先生からもお話しいただきました

けれど、この子どもフォーラム、実は子どもフォーラムを開こうと、知念先生が発案なさったわけです。

丁度その頃第三次振計の構想づくりがありまして、私ども小児保健協会はどんな形でアピールしていこうかということになりました。それならこの機会に「沖縄の子ども達のために何が出来るか」県民にアピールする必要があるんじゃないかということになりまして、その為にはどういった方法があるのかということで、子どもフォーラムというものに繋がっていったんだろうと思います。

このフォーラムを開催するにつきましては企画委員長の知念先生がそれこそ自分の大切な時間を割いて色々と企画していただきました。その企画に基づきまして開催しました。また多くの方々の教えもいただきました。パネリストの方々もボランティア的な形で色々とご協力いただきました。

また琉球新報社の親泊社長さん、私達がこの企画を持ってまいりましたらそれこそ二つ返事でよしやろうということでお引受けいただけたものですから、琉球新報社の大きなバックアップも子どもフォーラムを成功にもたらした大きなものであっただろうと思います。

安次嶺　このように協会はまだまだいろいろな活動をしているわけでございますが、私ども協会の活動が中央でも認められた結果この度栄えある保健文化賞を受賞して、この前、会長と、副会長が授賞式に行って来られたんです。この賞についてご説明下さい。

小渡　保健文化賞というのは実は大きな賞であることは間違いないわけです。いろんな地域での活動、そういったものを長年に亘ってやってきてそして大きな成果を上げている個人や団体に贈られる賞だと聞いています。県内でも恐らくこの保健文化賞は個人としては琉大医学部の名誉教授である照屋寛善先生、それから愛楽園の園長をしておりました犀川一夫先生、こういった方々がおられます。団体では沖縄県結核サーベラス研究協議会というのがありまして、復帰直後に受賞しています。その後３年程前に県の歯科医師会が障害児の歯科診療ということで、これが認められて受賞しています。ですから団体としては県内では３番目ということになるんです。

私ども小児保健協会が保健文化賞に認められたのは、復帰後から２０年に亘って乳児健康診

査を実施してきたこと、そしてそれによって地域の子ども達の健康に大きく寄与したというのが一つ、それと同時に講演会、研修会等を開催し、それが地域の子どもの小児保健に関する県の普及に大きく寄与したこと、この二つが認められて賞をいただいたということになっています。表彰状にもそういった形で記載されています。

安次嶺　この賞はこれまでの私どもの協会の活動に対する評価でもありますが、今後ともこの賞に恥じないような活動をして欲しいという励ましの賞でもあったというものですね。これから私どもの小児保健協会は、沖縄の小児保健活動の中心として頑張っていかなくちゃいけないわけですから、今後我々は何をめざしてどのような活動をしていくということについて、仲里副会長にお話しいただきたいと思います。

仲里　こんな大きな課題を私が言うのはどうかと思いますが、事務局の裏から見ての感じをお話ししたいと思います。

これからの社会というのは物凄く変わっていくと思います。これまでもだいぶ変わって来ましたし、とにかく少産化というのがあります。

子どもが少ない、それでいて高齢化社会が急速に進んで行く中で、これからの社会というのはどのように成り立っていくのかというのを考えた場合、どうしても子どもへ目を向け私達が解決しなければならない大きな問題があるのです。

この小児保健協会が今後どう活動していくかということは、社会にとっても大きな影響を与えるのではないかと思っています。

健やかに子どもを産み育て健康な社会を作り上げるために、小児保健協会の活動の拠点としてのセンターのような場が必要です。小児保健協会のセンター建設はこれから私達の小児保健協会にとっても大きな活動の中心になっていくものではないかと思います。

具体的にこれからの子どもの問題というのを考えた場合、どうしても公的な保健医療機関ではむずかしく団体しか出来ない、という特性のある活動が沢山あると思います。そのような活動を行うには、やはり場が必要だと思います。

これからは小児保健協会に参加している、小児科医、歯科医師、保健婦、助産婦、看護婦、栄養士、保母、検査技士、学校の先生、行政機関など多くの職種と共にいろんな面より沖縄を支え、さらに国際的に世界を支えていくくらいの大きな夢を持って小児保健協会の活動を押し進めたいなと私はそう希望しております。

知念　これからは沖縄県の小児保健協会が国際的なことにも目を向けて、とくに東南アジアの子どもたちの健康の為にも何か活動の拠点になっていければいいんじゃないかと思います。

安次嶺　同感ですね。私どもはこれまで子ども達の健康を守り次の世代を、時代を担う人々を健全に育てていくということに係わってきました。今私達がどのような活動をしているかによって次の時代が変わってくるかもしれないわけですね。

私どもが今やっていることは後になって評価をされることでしょう。私どもの責任は非常に大きいと思います。ですから小児保健協会の会員皆で力を合わせて、これまで以上に活発な活動をしていきたいと思います。

そしてまた、１０年後２０年後に私どもの歩みを振り返って、さらに評価が出来るということになれば幸いです。

本日はお忙しいところ色々と貴重なお話しをしていただきまして、本当に有り難うございました。ではこれでこの座談会を終わりたいと思います。